

観自在

弘長寺寺報
第十一号
平成十七年
八月

山陰でピカイチの阿弥陀堂

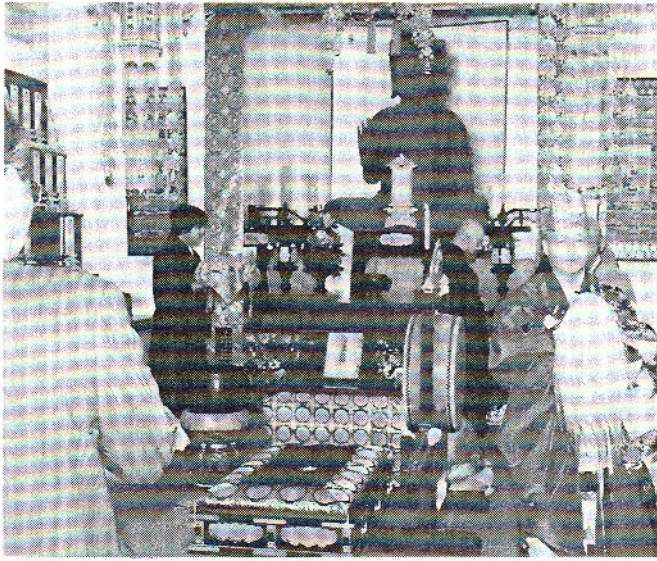
弘長寺住職 森田裕光

実は、腰が抜けるほど驚いたのです。

「なるべく木の地肌を生かし、そのままに修復を願います」と、よくよく頼んだはずなのに、二月十八日、名古屋から帰らぬ、グルグル巻ききの白布を解かれた阿弥陀様は、真っ黒けになってお帰りになったのです。

「何てことだ」一瞬間の中は真っ白です。

工事中のお堂の薄暗がりの中に鎮座された仏像は、正



落慶法要 浄道場開眼

平成17年4月17日

直薄気味悪い感じさえしておりました。

ところが阿弥陀堂が完成し、ライトアップされた阿弥陀様に対面したところ、古代仏のような年代を感じさせられる、我が眼を疑わんばかりの神々しい姿に変身させられたのです。

お顔も、以前とは全く違うキリツと締まりのある有り難いお顔が浮かび上がり、思わず礼拝をしておりました。人間は勝手なものですな。

(何でこんな黒いお姿に)とうらみがましく思っていた心が、有り難さに思わず手を合わせるのですから。

さすがにプロの仏師、と感嘆いたしました。仏具屋さんが「山陰でピカイチの阿弥陀堂」と表現されました。

四月十七日快晴、寺檀積年の願がここに成就、晴れやかに落慶法要が厳修されました。

教育委員会の主催で特別講演として、島大名誉教授・大阪工大教授である井上寛司先生の講演を設けましたが、解りやすく興味深いお話をされ、聴衆も「我が菩提寺の詳細な歴史」を熱心に聞き入っておられました。

六月、護持会の代表(武田会長・坂本副会長)と井上先生、さらに一月「経筒」の講演をしていただいた県文化財課の西尾先生、二月「胎内銘」の講演をしていただいた松本先生、そして教育委員会六道分室長・稲田氏にお集まりいただき、阿弥陀尊像の貴重な資料に対する今後の方針を検討していただきました。その結果、今までの判明している阿弥陀像に関する情報を、教育委員会主導で早急に一冊の本にまとめることに決定いたしました。

お檀家の皆様方が読みやすく解りやすい本に作り上げたいと思っております。そして、井上先生から「県重文の指定を受けるべく、申請作業も進めていくことが重要」とのお言葉もいただきました。

県指定文化財を 目指して

弘長寺護持会
会長 武田民三

檀家の皆さまの心が一つとなつて、立派な阿弥陀堂が建立されましたこと、今改めて心からなる慶賀の念を深くする次第であります。

皆さまの先祖をお祀りする金位牌は、阿弥陀如来の像の懐に抱かれ、見護ら

さて、胎内銘と経筒を蔵して、阿弥陀如来像は、文化財として高貴な歴史資料として共有な存在として、平成十六年十二月十七日に早稲田町有松江七

改築落慶法要の記念講演においで大阪工大教授(井上寛

司先生は、その結びで、納め阿弥陀尊像、州の霊地に見奉る六意胎内、例を以て、全胎内著名な霊地を、長寺にと、文字通り、願望と浄土の味を築くつもりで、強い願望と大地が民衆の宗教的熱情を、めがけて、重なる文化遺産に値する、



講演中の井上教授

そこで、弘長寺護持会と、

井上寛司先生を委員長とし、西尾克美先生、松本美和子先生を中心とする出版先にお願いをし、編集基礎資料を、

尚、その寛文二年、義林和尚、書した棟札と、昭和三十五年正月、再興と、昭和十五年正月、宗泰、大寂、和

弘長寺の歴史により、金宝山といふことが明らかになりました。

檀家の総力で、重要文化財の指定を獲得し、菩提寺のさらなる興隆を期する

合掌

お知らせ お願い

●阿弥陀堂が完成しましたが、お盆・正月のお供えは、餅・米・お餅、ご自分でお供えしていただきます。

●阿弥陀堂改築は二・三世紀に一度の大事業、個人としては、ちろんと喜捨が個人として、率先して喜捨すべきと考へ、



幢幡

●胎内文化財の発見に機を合わせたように、思いがけず多数の古文書が出て参りました。

お知らせ

お願い

●この度境内に(秋葉堂隣り)歴代住職や寺族の総廟を建立しました。

当山の御墓は四ヶ所もあるが、かねてより総廟建立を計画しておりましたが、昨年石材店と本格的に打ち合わせを始め、阿弥陀堂改築が先行し、工事が始まりました。阿弥陀堂改築も待って、阿弥陀堂改築も完了し、落慶法要も無事終わりましたので、今夏総廟建立に着工致しました。



ほぼ完成した総廟

最近近隣の寺院でも総廟にされるものが多くなり、先般、金山の豊龍寺様も立派な総廟にされ、西城寺様や雲松寺様も計画が、ありのようです。

弘長寺を建立した鎌倉時代の地頭・藤原満資(関東・武蔵)の国より来た(と)その一族や、その時の最初の住職・開關開山「實庵見貞大和尚」の江戸時代に曹洞宗松江洞光寺末寺となつた時の開山「天麟星壺大和尚」はじめ歴代住職や亡僧などを祀つており、その墓にお詣りの際はどうぞお墓に手をお合わせ下さい。

●新しい総廟の前に(開關・開山・開基)墓石戒名の由来を書いた石碑を、護持会で喜捨いただき、感謝申し上げます。但し、八月七日の施食会には間に合いません。

●開基・藤原一族の墓地は文化財としての価値があるので、今までの場所に修復整備して別に残すことに致しました。

●阿弥陀堂はいつでもご自由にお参り下さい。火気後始末等防炎管理のため、必ずお寺に声をかけ下さい。

●坐禅会にご参加下さい。参加者が増えつつあります。

妙岩寺方丈様・武田民三氏・武田正伸氏・木幡義則氏が在のメンバーです。イスでの坐禅もOKです。毎月第一木曜日朝六時より阿弥陀堂にて。



坐禅会の様子

●阿弥陀堂は坐禅会や梅花講の研修に使っており、文財を拝観に来られる方も増えて来ました。松本先生の「古文書を楽しむ会」(写真)や松江・龍覚寺と宗泉寺の「ともしび会」(20名)など団体拝観も増えております。

●お正月の般若会にお参り下さい。朝五時より。年頭に、家族そろって仏様の大般若転読功德力を直接お受けする修行をお積みください。

●住職もサラリーマンです。「坊主丸儲け」という言葉は遠い過去のお話で、現在では全く当てはまりません。

弘長寺は宗教法人なので、管理の下で運営しております。住職は法人から適当と思われ、給料をいただいています。法人の会計は、年に一度、責任役員方(土江嘉久氏・仲田克美氏・武田民三氏)の厳正な監査があります。監査時に布施収入の額などが、その通りに記載されています。個人名は人権に触れるため伏せています。

時々、税務署の調査が入りませんが、いい加減な会計はできません。



松本先生の「古文書を楽しむ会」来山

寺族のひとりごと

弘長寺寺族 森田久美子

お寺に生まれて七十余年、子ども頃から何気なく手を合わせていた阿弥陀様にこのような事実があったとは、本当に驚いています。阿弥陀堂も新しく建て替えられ、阿弥陀様もとても喜んでおられる事でしょう。

東堂が五年前に病に倒れてから介護の日々が続いておりますが、福祉制度を利用しながらの自宅介護です。

しかし介護は想像以上に体力を使います。

年を重ねる度に体が弱くなり、腰痛がひどくなってきました。

四ヶ所もある(以前は八ヶ所)お墓の掃除や墓参に苦痛を感じるようになって、急な坂が中々上れません。

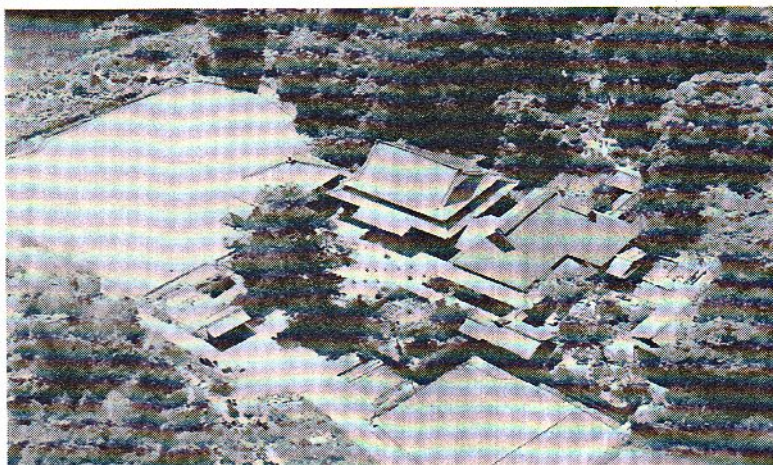
この度境内の近い場所に総廟建立を決意し、毎日墓参が出来るようになります。

子どもの頃から今日まで、お寺もずいぶん変わったものだとつく

空撮による昔の弘長寺

庫裡はワラ葺きのトタン屋根
周りは田んぼでした

(昭和四十年頃です)



づく思います。

昔は寺の周りは田んぼと畑で、農作業に追われる毎日、お寺と農業とどちらが本業か分からぬような状況でした。

また、庫裡も蔵も床が抜けたり雨漏りがしたり、ひどいものでした。

現在の第二庫院の場所は、以前

は瓦の落ちてくるような老朽化した二回建ての危ない建物で、結局昭和四十五年頃取り壊しました。

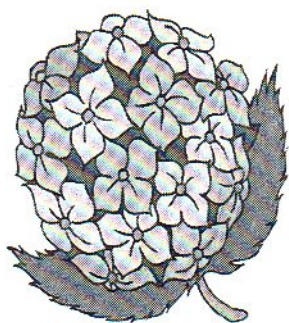
取り壊しただけではいけないというので、東堂が研修道場を兼ねた第二庫院として建て直しました。

思えばなつかしい思い出がたくさんあるのですが、本当に昔の面影が無くなってしまっうほどの変貌をとげています。

こうしてお寺がすこしづつ良くなっていくのも、お檀家様のお力と、阿弥陀様が陰で見守って下さっていたからかもしれません。

これからも益々弘長寺が隆昌し、お檀家様に幸多かれとお祈りする次第です。

合掌



○やり直しのきかぬ

わが人生

だが

これからの生き方を
変えることはできる

○与えるとき

人はゆたかになり

惜しむとき

貧しくなる

○心配しなくてもいい

死ぬときは

そのこわいという

おもいぐるみ

死んでいくのだから

内山興正師

「梅花講」入講半年で

全国大会参加

梅花講雪組 勝田光代



平成十七年度梅花流全国奉詠大会(山口県)に参加させて頂くことになり、行く前から期待と不安でソワソワドキドキでした。

さあ出発、一日目は観光。錦帯橋や国宝である曹洞宗寺院瑠璃光寺五重塔へ参拝、その下でパチリと記念撮影。

宿泊は湯田温泉「かめ福」、温泉の湯とごちそうで一日の疲れを取り、明日に備える。

二日目いよいよ大会当日。会場の「きらら元気ドーム」に着きましたが、降りたたん傘を飛ばされそうな強風と雨の歓迎にたじたじでした。落ち着いて見渡せば、会場や駐車場の広さに圧倒される。

第一部開会式の導師入場で、曹洞宗管長・宮崎奕保禅師様が車椅子にてご登壇されました。百五歳のご高齢にも拘わらず、お顔の色艶は良く、しっかりとしたお言葉でご垂示を賜り、感動し、涙が出る思いでございます。

した。

第二部の式典が終了、第三部で青森県から登壇奉詠が始まりました。

私たち島根県第二宗務所は最後に近い十三番目、岡山県との合同奉詠で総勢五百余名からなる登壇です。

緊張の瞬間、習ったばかりの「地藏菩薩御和讃」を懸命にお唱えし、大役を果たした思いで感無量でした。

第四部はアトラクション、多々良学園の附属幼稚園から高校生

の演奏。かわい幼稚園児の踊りや歌で元気なパワーを頂き、和やかな内に終わり、

第五部閉会式にはお世話をして頂いた皆さまに感謝しつつ、名残り惜しく退場し、帰路につきました。

合掌



国宝・瑠璃光寺五重塔前にて

大本山総持寺へ

参拝して

鏡 勝部 博

一度はお詣りしたいと思っておりました曹洞宗大本山総持寺様に参拝出来たことを誇りに思っています。

まずバスを降りるなり伽藍の大きさに驚きました。

大きいとは聞いておりましたが、なにがなにが、その堂々とした風格はさすがが大本山と感心致しました。

まず目に入るのが三松閣の天をつくような高さで、屋根の風格は言葉では言い表せません。それに、その周りの樹木の手の入れの良さときたら、木の葉一枚落ちていませんでした。

次に広々とした新しい大講堂での開講式は、司会が菩提寺の森田住職でとてもすばらしく、さすがが教化主事と感心しました。

坐禅は永平寺で経験していましたが、静かで咳一つ聞こえてこない講堂での坐禅は、改めて身も心も引き締まる思いでした。時折聞こえる警策の音に雑念を捨て、真心に帰る思いがしました。

また、法話では過去・現在・未来を見据え、人の道に違わぬようにとの教えを頂きました。ご修行中の雲水さんは礼儀正しく、言葉遣いも丁寧で、修行

の厳しさが伝わってきて頭の下がる思いでした。

伽藍内部は何処も、ただ清掃をしたというのではなく、磨いて光っているという表現が当たっているように感じられ、自分もこのように心がけねばと言いつけました。

法堂(本堂)での朝のお勤めは、大勢の僧侶の読経の中を、小走りに立ち回る雲水さんの動作の小気味よさに、より有り難さが増し、法悦に浸らせて頂きました。

研修を終え、心身共に清々しくなったところでバスに乗車し甲州へ、仏天のご加護か天気に恵まれました。



河口湖にて

バスガイドさんは少しお年を召しておられました。中々の名ガイド、名調子で社内は笑いと拍手の連続で、とても楽しい旅でした。

最後に、お世話になったご寺院様方、共に一緒させていだいた皆様方に感謝するとともに、皆様の幸多からん事をお祈り申し上げます。

合掌

誌上法話

南無観世音菩薩

森田裕光

う私は、京都の興聖寺とい
致し、道場で、2年間修行
嫌、寺院長男の縁に後継を
九あり、三月、三十五才で出家
を、修行生活に入り、九月、
り、修行生活に入り、九月、

後、四ヶ月が経ち、やっと道
場には、空気に慣れ、一週間
登(参拝)両親が興聖寺
来ると、七月十二日の
夜、七月十二日の

町、突如、実家のお寺(広瀬
か、大電話が入りました。
た、大変だ、方丈が今朝倒
管、切れて、倒れ、血の
で、手に、え、倒れ、血の
移、送れた、順番待ちで、
が、修行中だから、内密に思
た、危ない状態、一応覚
絡、おいて、くれ、一、
悟、おいて、くれ、一、
思、おいて、くれ、一、

ともできなかった。
の、上履き草履の後でした、私
と、切れた、これは、だめだ、
は、もうこれ、違い、ない、と、
感、死んだ、違い、ない、と、
う、ど、監寺寮に行き、ちよ
が、監寺寮に行き、ちよ
告、げ、ます、と、匠、様、の、
な、また、お、う、と、あなた、
を、な、さい、と、あなた、
袈、装、をつ、け、て、観、音、
て、ある、天、竺、殿、で、共、に、
経、を、読、經、して、いた、だ、
た、を、読、經、して、いた、だ、



この命を助けて、師匠は
の、命、を、お、助、け、て、
心、に、祈、り、ま、し、た、
す、不、思、議、な、も、の、で、
に、映、ら、な、か、つ、た、観、
に、映、ら、な、か、つ、た、観、

まるで生きていたか、
に、尊、く、本、当、に、慈、悲、
え、て、ま、い、り、ま、し、た、
「も、し、か、し、ら、救、つ、て、
え、る、か、も、し、れ、な、い、」
一、心、に、祈、り、し、た、
終、わ、つ、た、直、後、に、弟、
「ど、う、だ、駄、目、か、」
「い、や、大、丈、夫、だ、先、
寝、て、る、の、か、意、識、が、
分、か、ら、な、い、が、静、か、
お、袋、が、面、倒、み、て、る、
夕、べ、は、一、面、倒、み、て、
シ、ョ、ツ、ク、と、疲、れ、
ふ、く、ろ、が、ダ、ウ、ン、
興、聖、寺、の、堂、長、様、
て、く、ら、の、師、匠、の、
「か、れ、な、い、か、」

堂長様も快く許可を下さり、
帰路につきましました。
い、ま、し、た、
肉、親、の、生、死、が、
る、状、況、下、で、上、履、
に、映、ら、な、か、つ、た、観、

切れる、と、偶然に、
驚、き、き、つ、と、あ、の、
死、線、を、さ、ま、よ、い、
な、か、つ、た、の、だ、ら、う、
の、は、あ、の、観、音、
そ、う、い、え、ば、私、も、
の、ご、開、山、道、元、禅、
で、の、修、行、を、了、
ら、れ、る、途、中、嵐、に、
わ、や、船、が、転、覆、せ、
静、か、に、観、音、經、を、
た、と、こ、ろ、波、の、
葉、観、音、様、が、現、れ、
ろ、に、嵐、が、静、ま、り、
本、に、お、話、し、を、思、
う、お、話、し、を、思、
違、い、な、い、私、は、
「観、音、様、あ、り、が、
ま、し、た、。ど、う、か、
師、匠、の、手、術、が、
助、か、り、ま、す、よ、う、に、
世、音、菩、薩、南、無、
世、音、菩、薩、南、無、

病院に駆けつけますと、
匠、は、呼、び、掛、け、つ、
い、る、だ、け、で、し、た、
後、翌、日、八、時、間、に、
れ、な、い、後、遺、症、は、
大、丈、夫、が、と、り、あ、
私、は、目、頭、が、熱、く、
先、生、に、合、掌、い、
に、映、ら、な、か、つ、た、観、

手術後このまま植物人間になつてしまふのではと覚悟して、いんどん回復してまいりました。

それとそれに連れて看病が大変になつてきました。頭の病の看病がこんな大変だとは思つてもいせんでした。

私の母と交代に寝起きしての看病生活が始まりました。

師匠の目はいつも優しい目、絶対安静を言ひ渡された目、絶対の上で、八五の巨漢を揺すつて暴れたり降りようとしたりします。

仕方がないので手足をベツドに縛りつけました。

しかし、暴れたため鼻から髄液が出るようになりました。

は、この髄液が止まらない場合は、上の歯茎を切り開き、鼻の奥の、大手術をしなければならぬ、と言ひ渡されました。

何と、絶対安静にしなければ、必死で、手足をベツドに縛り、暴れる度ベツドの上に乗つて押さえつけ、足を叩き、腿をつねりました。

師匠の私を見る目は鬼を見目のございました。

「自分には鬼になつてもいい、この髄液が止まるものなら、この病気が治るものなら、ごめんない、南部観世音菩薩」と唱えながら叩き、つねり続けました。

おかげで師匠はアザだらけになり、一時は大手術を覚悟したその髄液が止ま

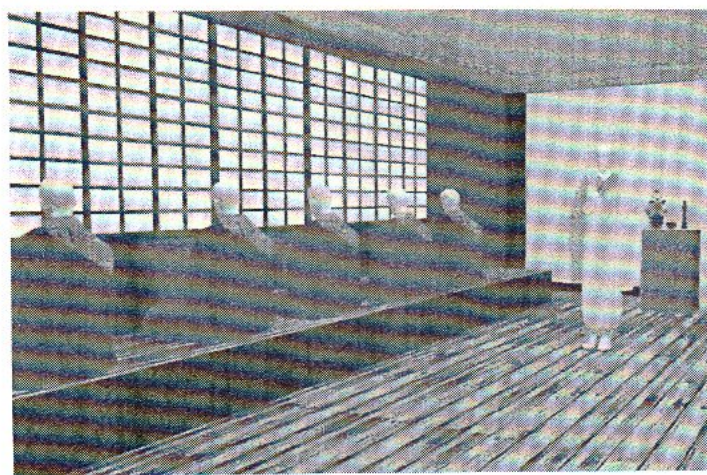
たときの嬉しかったこと。

それからの復元を見せ、正常な目に戻りました。

自分より半年も一年も前に手術した人がまだベツトで寝て退院したの尻目に、一ヶ月半でこれ以上の喜びが他にありません。

二ヶ月ぶりに修行道場にお礼を述べました。言葉になりません。

天竺殿の観音様の前で礼拝し、あまりの有り難さにあふれる涙を抑える事が出来ませんでした。



修行道場

それから半年後、年が明け三月、絶対にもうあり得ないと思われた両親の興聖寺にお参り、御開山拝登が実現致しました。

夢の如くというのはこの事をいうのでございましょう。

この観音様に救つて頂いたの目にも涙が光つておりました。

その二ヶ月後、縁あつて現在、その道町の弘長寺に弟子・養子として入りましたが、何とご本尊様が観音様でございまして。

私は観音様との縁がより一層深まつた思いが致しました。

一切に思ふ事は必ずとぐるなれば、強き敵、深き色、重き宝なり、必ず方も切に思ふ心深ければ、必ず、是、天地善神の冥加もあべし、是、成す善なり、道あり、禅師様のお言葉でございす。

世に利益などではない、単なる現世の願ひだけではない、菩薩行とこの願ひをいふのは、菩薩行といわれます。

この人を先に救えば、自分が救つても、わかつて、可能性がなくなると、徹底的に他人を救つて、利他行ともいわれます。

草履の緒が切れ、監寺老師のお話を申し上り、髪師に入らずに、それが、貴方の髪

お師匠様の為に祈りましょう」とおっしゃつて下さった。

「ああ、そうですか、それは心配です、その言葉だけで、終わつても不思議がないのに、額当分の如くお袈裟をつけて、額に汗を浮かべて読経して頂く。この尊い行為こそ菩薩行ではないだろうか。

私の父は監寺老師の菩薩行が観音様に届き、救つて頂いたのだと確信致しました。

修行道場に入ったばかりで、仏道に對する信心が曖昧で心もとない私に、観音様への縁を下さつた。

信仰の深まる機縁というものは、そういうものなのでしょう。私にとつて終生忘れることができません。

「南無観世音菩薩」

※布部・安養寺の師匠は、平成十一年三月遷化致しました。

※監寺老師は、現在天桂禪師で有名な大阪・陽松庵住職でいらつしやいます。

※この原稿は昨年、四季社から刊行された「曹洞宗観音経法話実践講座」(監修酒井大岳) (価格一万六千円) に所収されました。

★寛文二年（一六六二年）に義林叟謾和尚（前永平とあります）ので住職経験者です。その時の住職が薫蒲和尚ですから、東堂《隠居》ではないかと思われる）が書写した阿弥陀堂再建時の棟札の内容です。（棟札そのものは、木に住職がしたためたと思われますが、残っていません。）

一六三八年、松平羽州太守（従五位出羽之守）《松平出羽介直政》が、一代で終わつた京極氏の後を受け、信州松本より松江城に移封、初代出雲・松江藩主（松平は十代続く）となった。直政公は一六六六年に亡くなるまで藩主を務めた。（故に寛文二年は直政公の晩年にあたる）
時の住職薫蒲和尚が御堂の荒廃を嘆き藩主に懇願し、藩主直

弘長寺阿弥陀堂棟札
 夫弘陀者鼓音王經云過去久遠劫中有國名
 妙喜王名憍尸迦祖父清恭國王父月上轉輪王母
 殊勝妙顏王后三子長曰月明次曰憍尸迦三曰帝眾
 時有一佛出世號世自在如來憍尸迦棄捨國位提攜
 出家名曰法藏比丘對如來發四十八種廣大行願普度
 一切眾生若一願不滿者誓不作佛是時諸天散華
 大地震動空中讚言次定成佛而世人何不歸依哉
 又法華云或有人禮拜或復但合掌乃至舉一手或
 復少低頭以此供養像漸見無量佛自成無上道廣度
 無量眾而諸人何不禮拜供養哉又般舟三昧經云跋
 陀和菩薩問釋迦牟尼佛未來眾生云何得見十方佛
 佛教令念阿弥陀佛即見十方諸佛而一如眾生回念佛
 哉以是見之諸佛體同故稱同名同號四聖六凡皆同
 此理且諸佛皆此理故聖眾生迷此性為凡性何有二
 耶又云稱我名号定生我國不得是願終不作佛又云

政公が弘長寺住職の願に共鳴し、藩の財政で御堂再建の工事費
 ・木材・人夫を提供したという、驚愕の事実を記した大変貴重
 な資料です。
 ※この他に、昭和二年に阿弥陀堂修復をした十五世・泰覺大和
 尚の棟札や、その時に判明したと思われる仏像胎内の資料等
 が、山内から本年、多数発見されました。

念年手越有在衛門尉藤原朝臣薫蒲和尚再建
 極樂寺里州禪門平時賴取明寺禪門道常此二君
 為得證菩提創奠一宇安堂彌陀珠造堂長
 令住止三十個衆僧昭示世不斷念佛更為寺願分
 捨入數町之田畠山林其可謂七分人全功德寺殿後廢
 碧弥三郎同性彦次郎者亦領當取不黑光例高附
 多事詳在千經起證狀不及再誌焉其後之地頭悉沒收
 寺領而掛山林寺內之所不斷念佛亦急堂宇廢壞
 而粟像已欲爛風雨笑見之者無不流淚今住持常蒲
 見彼荒廢不能感慄欲修造之隨願力念思而止奉令
 曰當國松江城主源朝臣松平羽州太守之幕下當時住
 郡奉行瀧善兵衛尉本因六兵衛尉德川官小川德大夫柴
 久振新執權所公儀材木五人奉寄所之特辦備借工
 匠財用依此修造功就可謂諸善奉行矣伏願上眾後
 乾坤覆載日月照臨皇帝萬歲國司千秋胤調而順
 恭民安更祈捨財之施主信心堅固外障無侵道念
 精專內魔不起咸悟真常同生淨土矣野僧以贊
 佛德云尔仰冀 昭鑒
 無量壽佛放光先妙相端嚴坐道場十萬億裡何
 遠隔唯心清淨此西方 廣文二壬寅花月吉日 1662年
 前永平義林叟謾書焉